

編集後記

平成 25 年 10 月上旬から 12 月中旬まで、愛媛県内 71 校の高等学校をまわり、地域づくりやボランティア活動についてヒアリング調査を行いました。生徒数 1000 人程のマンモス高校や、有名大学への進学率の高い高校、私立・国立高校の取り組み、また、豊かな自然に恵まれているが年々生徒数が減り続けている高校等、おかれている状況によってボランティアに対する考え方、取り組みが違います。

車で南予方面に行ったのは 11 月、紅葉の見ごろの頃でした。暖色に染った山々は私と距離を縮め、優しく出迎えてくれているように見えました。過疎化が進むその地域では、高校生は地域の担い手で、お祭り等の地域のイベントや竹林の伐採など、若者の力を必要とされているところで活躍していました。地域の方々も高校生が協力してくれることに感謝し、高校生もこの地に生まれ育って良かったと感じていることが先生の言葉でよく伝わりました。高齢者が多く地域産業のない瀬戸内の高校についても同じことが言えそうでした。地域貢献やボランティアという言葉が、敢えて使われなくても日常の生活の中で育まれている学校の生徒数が減り、存続の危機にあるというのは残念なことです。

また、「ものづくり」をテーマに専門性を生かした学校での取り組みや、町の活性化に高校生ががんばっているところもありました。

高校生は、「このようなことで喜んでもらえる」ことに驚き、「ありがとう」と言われることで、「次もやってみよう」と思うようです。日常の一つ一つが明日の彼らにつながります。

2001 年、アメリカ合衆国ハワイ州のオアフ島沖で、愛媛県立宇和島水産高等学校の練習船「えひめ丸」がアメリカ海軍の原子力潜水艦に衝突され沈没した事故がありました。水産高校には慰霊塔があります。高校生を乗せて現在もえひめ丸は海へ出ていきますが、あの悲惨な事故を忘れまいと水産高生が近隣の小学校へ出前授業に行っているそうです。危険と隣合わせにいることを彼らは意識し、小学生に教えることで命の大切さを知りましょう。

自主的なボランティア活動をするための始まりは、部活動であったり、特別活動であったり、授業の中であったりすると思います。今回、ヒアリング調査にあたり、特活、生徒会、JRC 部、人権委員会、ボランティア部、VYS 部、家庭クラブ等の顧問の先生にお話を伺いました。あらかじめ資料を用意していただいたり、ボランティアに対する思いを語っていただいたり、顧問をされている活動について語っていただいたり様々でした。ボランティアという言葉の捉え方も学校によって違い、限られたスペースのためヒアリング内容をすべて載せることが叶わず、一貫性のないレポートになってしまったことを深くお詫び申し上げます。

高校というフィールドで、ボランティア学習を通じて自分を認め、他者を愛し、共に生きることを体感してほしいと思っています。それが、かれらの将来を実りあるものにすると信じています。

最後になりましたが、お忙しい中、調査にご協力していただいた 71 校の先生方に心からお礼申し上げます。ありがとうございました。